

富士川往来の歴史

～富士川の流れと街道の変遷を学んでみましょう～



富士川の特徴は？

新しい橋がかかる富士川ってどんな特徴があるの？

富士川の流れは速い

南アルプスを源流とする釜無川と、秩父山地を源流とする笛吹川が、甲府盆地で合流して富士川となり、静岡県駿河湾に注いでいます。全長は約128kmにおよび、3,000m級の山々を水源とするため、流れが急であり、日本三大急流河川の一つです。

①球磨川（熊本県）②最上川（山形県）③富士川（静岡県・山梨県・長野県）



今とは異なる富士川の流れ

富士川が駿河湾に流れる下流域は、今と昔では大きく異なります。

図のとおり、岩本山の麓から東南方向の田子の浦付近まで、河川域が広がっています。今の富士駅や新幹線駅は氾濫原にあり、潤井川や和田川辺りまで富士川の一部であったと考えられています。



富士山かくや姫ミュージアム資料より引用

今に残る歴史の証

【古代～平安時代】

富士川の氾濫原では、古代～奈良・平安時代の遺跡が発見されていません。人が暮らした地域には、土器や住居跡、墓地などの痕跡（遺跡）が発掘されていますが、この地域には遺跡がなく、人が住んでいなかったと考えられています。



【鎌倉時代】

鎌倉時代の尼僧により書かれた紀行文「十六夜日記」には、1277年、京都から鎌倉への道中、富士川を渡るのに、瀬の数が15もあったと記述されています。“瀬”とは細長い川のことであり、鎌倉時代の富士川は、細い川が幾つも流れる様相だったと考えられます。



今の富士川の形になったのはいつ？

鎌倉時代までの富士川は、今とは全く違う流れをしていたんだね。じゃあ、今の流れになったのはいつごろからなんだろう。

雁堤（かりがねづつみ）の整備

江戸時代初期、全国各地で河川の治水と新田開発が行なわれ、富士川でも東側の下流域が新田地帯として開発されました。この開発に尽力した古郡家三代は、50年余の歳月と莫大な経費、そして治水の工夫を結集して、雁堤を完成させました。

雁堤は岩本山の麓から富士川を西側に流すことを目的に整備された堤防で、この整備により東側への氾濫をなくし、今まで氾濫原であった地域が新田となりました。以後、氾濫から守られたこの平野は、「加島五石の米どころ」ともいわれる豊かな土地に生まれ変わります。

雁堤の名称は、堤防の形が雁（がん）が連なって飛ぶ形に似ていることから付いたものであり、その規模は岩本山から松岡水神社に至る全長2.7kmに渡ります。



富士市にとって大変重要な堤防

雁堤の整備により、今の富士市の平野部が氾濫に脅かされない、安全で安定した地域になったんだね。まだ350年ぐらしか経っていなのかあ。
富士市が今の形になるための、とても大切な堤防なんだね。

人柱伝説

今から300年以上前、度重なる決壊で雁堤の工事が進まないため、富士川を渡る千人目の者を人柱として川を鎮めようと皆で決めました。その日から千人目となったある老夫婦は、巡礼を終えた後に人柱になることを約束し、3ヶ月後に再び戻って来ます。

夫は白木の棺に入れられ、堤が最も破れやすい箇所の地中に埋められました。自分が生きている間は地中から鉦(しょう)を鳴らし念仏を唱え、それらが絶えたときは死んでいるだろうと言い残し、21日の間、地中から鉦の音が響いていたと伝えられています。

かりがね祭り

かつて暴れ川だった富士川に「雁堤」を整備した古郡家三代の偉業から300年を祝い、1986年から「かりがね祭り」が行われています。この祭りは、古郡家や、安全を祈り、犠牲になった人柱への畏敬の念を忘れないとともに、氾濫や築堤工事の犠牲者を弔おうという、地域の人々の思いから始まっています。

毎年10月の第1土曜日に開催され、高さの違う3本の「蜂の巣」と呼ばれるカゴに、地上から火のついた松明(たいまつ)を振り回して勢いをつけ、投げ入れる催しが有名です。



富士市HPより引用



富士市HPより引用





富士川を渡るには？

昔はどんな方法で富士川を渡っていたの？

たての運行（山梨県～静岡県）

今から約400年前、徳川家康から年貢米の輸送を目的に“富士川開削”の命を受けた京都の角倉了以らの手により、山梨県鵜沢から富士市岩淵までの水路が開通しました。

これにより、富士川の舟運は、甲斐・信州から駿河を經由して、江戸などに連絡する経済・文化の大動脈となります。

時代は移り、明治22年に東海道線、明治36年に中央線、さらに昭和3年に身延線、相次ぐ鉄道の開通に伴い、富士川の舟運は終焉を迎えます。舟運の南の玄関口である富士市岩淵では、今でも川岸に常夜灯が残っています。



富士市HPより引用



国土交通省HPより引用

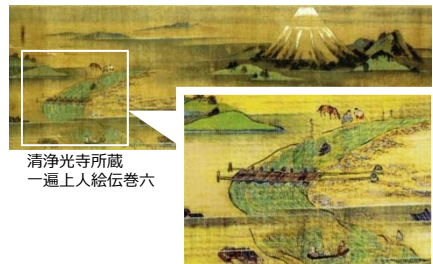


よこの運行（富士川を渡る）

古代～中世（鎌倉時代）

歴史上初めて富士川の名前が登場するのは835年、平安時代。朝廷が浮橋の整備を命じた記録が残っています。

また、全国各地を遊行した時宗の開祖一遍上人を描いた「一遍上人絵伝」には、1282年頃の富士川の渡舟と、舟を繋いだ橋（浮橋）の状況が描かれています。



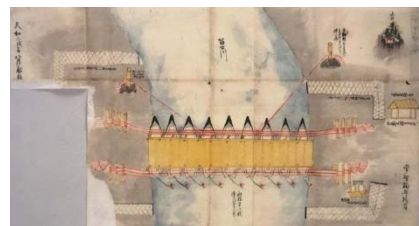
清浄光寺所蔵
一遍上人絵伝巻六

近世（江戸時代）

江戸時代に入ると、徳川家康は全国統一の政策として、東海道の宿駅制度を整えます。富士川は防衛などの目的から、橋を架けることはなく、渡舟による通行としました。

歌川広重の「東海道五十三次：蒲原宿」にも富士川渡舟が描かれています。また、渡船の運賃は幕府により定められており、この制度は明治4年まで続きます。

この時代、橋はありませんでしたが、1682年、朝鮮通信使が富士川を渡る際には、舟を繋げて浮橋を整備した記録も残っています。



富士山かくや姫ミュージアム資料より引用

現代（明治～平成・令和時代）

明治時代に入り、全国各地で鉄道の整備が始まるとともにモータリゼーションの進展により、富士川の橋が相次いで建設されます。

1888年：明治22年 富士川鉄橋開通（東海道鉄道）

1924年：大正13年 富士川橋 開通（旧国道1号）

1964年：昭和39年 富士川橋梁開通（新幹線）

1968年：昭和43年 富士川橋 開通（東名高速）

1971年：昭和46年 新富士川橋開通（国道1号BP）

2012年：平成24年 富士川橋 開通（新東名高速）

2023年：令和5年度 富士川かりがね橋開通（富士由比線）整備中



JR東海資料より引用



富士川を渡るには？

富士川を渡る場所は今と昔で変わっているのかな？

渡河の場所の変遷

富士川は氾濫原を流れる15の瀬からなる河幅の時代から、治水事業を経て、安定した河幅となった江戸時代。そして鉄道整備、自動車による現代へと、時代の変遷により、渡河する場所が変化していきます。

古代～中世（鎌倉時代）

岩本山の麓から南は氾濫原であったことから、古代の街道は、北を通行していたと考えられています。

現在の富士川楽座の場所にある破魔射場遺跡を始め、遺跡を繋いでいくルートは、江戸時代の街道よりも大きく北にありました。

近世（江戸時代）

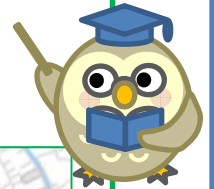
雁堤の整備により、平野が安定し、渡河する場所は南下します。

上・中・下のそれぞれの往還に3か所の渡船場があり、夏や冬、季節によって川の水量が変わるため、渡船の場所が異なっていたと考えられています。

現代（明治～平成時代）

土木技術の発展により、鉄道や新幹線、高速道路が整備されます。

特に、昭和30年代以降は、日本の経済成長を支える東海道として、急速なインフラの整備が進み、渡河する場所は、河幅の大きい南への位置を変えています。



まとめ

富士川の流れは、今と昔で大きく変わっているんだね。川の流れが変わることで、人々が暮らす街や街道の場所、川を渡る手段も変わっていくんだね。

過去の人々の知恵と努力が今の私達の暮らしの基盤となっていることがわかったよ。

令和5年度に開通する新しい橋は古代の街道の場所にできるんだ。

なんだか、歴史を知ると、この場所にかかる橋にロマンを感じるなあ。